

所属	言語文化研究科 日本語・日本語教育専攻 修士課程	修了年度	平成 23 年度
氏名	朴 賢貞	指導教員 (主査)	金沢 朱美

論文題目	『日語読本』と『訂正 国語読本』の特質をめぐる一考察 —教材分析を中心に—
------	---------------------------------------

## 本文概要

### 研究目的と方法

本稿は、植民地化前夜の外国語としての「日語」の教科書であった『日語読本』と、植民地化直後に修正され、国語教科書として使われた『訂正 国語読本』の教材分析により、当時の日本語教育の実態を詳しく調べることで、『訂正 国語読本』の原文のうち、実際に「訂正」された部分を取り上げ、当時の日本の朝鮮に対する政治的教育的意図が、どのように教科書に出現したのかを明らかにすることが研究目的である。主な研究方法は、『日語読本』の巻一から巻八までの全巻と『訂正 国語読本』の巻一から巻八までの全巻の原文を通し、両教科書の全巻を各巻と各課毎に分析を行うことと、『訂正 国語読本』の原文のうち、「訂正」された記述部分を中心に考察し、先行研究や関連文献資料を用いて研究を進めていくという方法を採用した。

### 結論

本稿では、従来の研究を通して『日語読本』と『訂正 国語読本』が編纂されるまでの背景を整理した。また、『日語読本』と『訂正 国語読本』を日本語教材として各巻と各課別にその内容を分析した。さらに、当時の急激な国政変動により、訂正された『訂正 国語読本』の訂正の実態をとりあげ、教科書からみられる政治的な意図を考察した。

まず、両教科書を初等学校教育用の外国語の教科書としての特徴をみると、日本語の表記に慣れていない低学年生徒のため、低学年の1・2年生用の教科書では、分かりやすく分ち書きで表記されている。直接法の教授法で、本の全体が日本語で書かれたため、難しく感じるのを防ぐように必要どころに挿話を入れ、児童に興味を持たせ、日本語を日本の文化とともに早く正確に理解させようと工夫されている。単語から句、句から短文、短文から長文のように、本文の長さも低学年から高学年になるまで多様で段階的に使ったことが分かる。使用されている文法や表現も難易度をちゃんと顧慮し、体系的に教授したことが伺える。そして、各課の最初に新出単語を提示し、本文の学習の後は練習問題も入れることで、習得の内容を反復して学習するようになっている。さらに、本文は日常生活から自然科学まで多様な主題を持ち、たくさんの知識も身につけるようになっている。

しかし、教科書の本文の内容と挿話からみると、その内容は、日本を中心とした新しい日本式の文化や日本の近代化と日本の行政体系、韓国から日本までの汽車路線など、児童に日本が優越しており、そんな日本の新しい近代的な文明を洗脳し、注入させようとする工夫がたくさんみられる。これは、統監府期に表面上には外国語教科書として編纂された『日語読本』であるが、実際には、もう計画されていた完全植民地化に繋がる日本語の教育政策を植民地前から実際に行った本であり、韓国の児童が日本語と日本文化により早く慣れてなじむように貢献した本であるとも言える。また、『訂正 国語読本』の訂正の実態から分かるように、過去の文明化された中国や百済から日本がたくさんの文物を受け入れた部分が丸ごと削除され、日清戦争や日露戦争を妥当化したことや日本がやった戦争は朝鮮を保護し、平和にさせる、つまり朝鮮のために戦争をしたという本文内容は注目すべきである。さらに、日本が国名を朝鮮と換えたことや朝鮮植民地は合法的に成立したことで朝鮮は日本の一部となったことを官公立初等学校用の教科書を通して、児童たちを自然に納得させたと考えられる。その点からみると、『訂正 国語読本』は当時の児童たちに日本は優越であり、日本の植民地化を妥当なものとして認識させるに大きく影響を与えた本であることが分かるのである。